

(別刷)

美術家として行う造形ワークショップに関する一考察

— 保育園・幼稚園での実践報告を通して —

西園 政史

生涯学習研究

— 聖徳大学生涯学習研究所紀要 —

第16号 別冊

2018年3月

美術家として行う造形ワークショップに関する一考察

— 保育園・幼稚園での実践報告を通して —

西園 政史

要旨

本論は、筆者がこれまで保育園（所）・幼稚園・幼児園において美術家として行った造形を用いたワークショップについてまとめたものである。美術家が、施設という環境のなかワークショップを行うことで、どのような経験が得られ、またこのワークショップに関わった保育者にとってどのような意味があったのかを、アンケートを通して考察するものである。

その結果、美術家がワークショップを行うことで、施設・保育者に対し新たな出会い、新たな学びを提供することが可能となることが導き出された。また、保育者は、ワークショップで得た内容を、その後の課題に反映させていた。しかし、これらの意欲も時間とともに薄れていくことから、今後の課題として、生涯学習としての定着のために、美術家と施設との継続的な関係が求められることを示した。

1 はじめに

(1) 研究の目的

近年、生涯の学びとしての美術の在り方について、学校、美術館、地域社会等で様々な試みとともに考える機会が増えてきている。しかし、まだ人々の中に定着するには至っていないのが現実といえる。本論は、筆者が保育園（所）・幼稚園・幼児園（以下、施設とする）において美術家として行った造形を用いたワークショップ¹⁾（以下、ワークショップとする）についてまとめたものである。内容としては、生涯学習のひとつの形として、美術家が施設という環境でワークショップを行うという試みのなか、どのような経験が生まれ、またこのワークショップに関わった保育者にとってどのような意味があったのかを、アンケートを通して考察するものである。

筆者はこれまで、美術作品をつくることと美術を教育的視点で研究・指導することを並行して行ってきた。その意味において本論は、美術家としてワークショップを実施し、美術教育者としてそのワークショップを分析するものである。

本論で扱うワークショップの実施場所は、和歌山県になる。和歌山県では、アートイベント「紀の国トレイナート」や「九度山芸術祭」へ参加することで、多くの関わりを持っ

ている。さらに、美術家である筆者の妻（作家名：榊貴美）の生まれ育った地であることから、この場所に何らかの還元ができないか、という願いから形になったものである。そこで、本論は、和歌山県において平成25年から平成29年までの間に、年間1、2回行った施設でのワークショップを研究対象とする。

(2) 先行研究

幼児と保育者を対象とした造形を介したワークショップに関する先行研究は、以下の論文がある。

1) 藤田知里「造形ワークショップ「リズムでねんど」の試み」²⁾

この研究は、子どもの造形活動をより豊かなものにするために、学生が中心となり、企画・運営したワークショップに関するものである。内容は、粘土を中心に置いたワークショップの様子が示されている。また、指導及び援助に入った学生の学びについて論じている。

2) 木谷安憲「保育者を養成するためのワークショップ的題材開発の研究—保育内容（表現・造形）の授業を通して—」³⁾

この研究では、短期大学を卒業する学生達が将来幼稚園や保育所などで働いた際に、園児たちと行う造形活動をいかに豊かにしていくか、という問題意識を根底に置き論じ

られている。ここでは、他の保育者や園児たちと工夫し、豊かな造形活動に取り組んでいこうとする保育者としての在り方について、ワークショップ的題材開発の授業を通して考察している。

以上の造形とワークショップに関して論じられた先行研究と、本研究との違いを整理すると以下となる。1)は、実践されたワークショップの内容が論じられており、生涯学習におけるワークショップとしての視点では、論じられていない。2)は、保育者としての生涯学習の姿勢を意識させるための、ワークショップの手法を用いた大学での授業内容と捉えることができる。そのため、地域社会を意識し長期に渡って行われた実践を論じた本研究とは異なる。

(3) 研究の方法

研究対象となるワークショップは、和歌山県にある保育園(所)・幼稚園・幼児園において平成25年から平成29年の間に実施したものとする。

まず始めに、ワークショップについて詳細を示す。続いて保育者に行ったアンケートを示し、全体を通して考察を行う。ワークショップの詳細は、ワークショップタイトル、実施者、実施場所、開催日時、実施時間、対象年齢と人数、施設に示したワークショップコンセプト、活動詳細、幼児の活動の姿の順に示す。保育者へのアンケートは、平成25年から平成29年までの研究対象となるワークショップ実施園(所)に、平成29年9月に一斉送付し実施した。アンケートは、全部で以下の6項目である。アンケート結果から、本論に関係する部分を抜粋し考察する。

以下、アンケート内容となる。

Q1. ワークショップをうけた幼児の様子はどうでしたか？

○楽しめていた ○普段と変わらない ○あまり参加できていなかった

Q2. 普段の造形活動とワークショップとでは、違いがありましたか？

○やったことのない活動だった ○一部同じようなことを行っている ○普段の活動と似ている

Q3. 今回のようなワークショップの内容を今後、普段の造形活動にも取り入れたいですか？または取り入れましたか？

○取り入れたい(取り入れた) ○部分的に取り入れたい(部分的に取り入れた) ○取り入れない(取り入れていない)

Q4. ワークショップ後、幼児に何か変化はありましたか？

か？変化の内容を含めお書きください。

Q5. ワークショップ後の園の様子として、教諭・職員、園など、何か変化はありましたか？または考えていることなど。変化の内容を含めお書きください。

Q6. ワークショップに関する感想を自由にお書きください。

2 ワークショップ詳細とアンケート

ワークショップは、筆者が主導して行い、保育者は、その活動を助ける位置にある。

(1) ワークショップ詳細

【活動1(別紙, 写真1)】

①タイトル:「へんしん!ふわふわ・きらきら・ざらざらでドーン!!～様々な形や素材を組み合わせてお面をつくらう～」

②実施者:西園政史・榊貴美

③場所:和歌山県 S 幼児園

④開催日:平成25年8月7日(水曜日)

⑤時間:午前9:30 - 11:30の2時間

⑥対象年齢(人数・グループ数):5～6歳(34名・2グループ)

⑦園に示したワークショップコンセプト:

「変身願望を満たしてくれるお面は、幼児にとって想像の世界を旅する道具の一つとなるのではないのでしょうか。

このワークショップでは質感の異なる様々な形や素材を組み合わせて貼り合わせることでお面を制作します。制作過程においては、視覚する、触れる、感じる、言語化する、想像する、創造する、といった一連の流れが、お面づくりを介して行われます。

幼児にとって、素材の違いは質感の違いを認識する場となり、さらに、日常生活で目にしている様々な物が造形表現として転換され、違う見方ができるということも学びの1つとなります。」

⑧活動詳細:

このワークショップでは、様々な素材を用いてお面を制作する。変身願望を満たしてくれるお面は、幼児にとって想像の世界を旅する道具の一つとなる。

制作手順としては、様々な形、大きさに切られ色の塗られた段ボールを土台とし、そこに様々な素材を貼り合わせ完成させる。土台となる段ボールは、形、大きさ、色が色々あるため、1つから3つ程度を組み合わせ、形を構成する。貼りつける素材は、ストロー、紙紐、綿、ボタン、布などの身近にある質感の異なる素材を使用する。様々な素材を

用いることで、幼児が素材に触れその違いを感じとることのできる場となる。指導者は、幼児に対しものに触れたとき、どのような感じがしたかなど、問いかけを行った。

このワークショップは、お面づくりを通して、何者かに変わることを想像する。また、制作過程では、質感の差異を感受することをねらいとし、幼児は色と形、質感の組み合わせを体験する。

⑨幼児の活動の姿：

この時期の幼児は、身近にあるいろいろな材料に興味を示し、触れるなどしてそのものを認識している。見ることや触れるなどして材料へ自ら働きかけることは、主体性を育てることにつながる。幼児は、自然と素材の違いを、触れることで感じとっていた。また、色と形、質感が多種多様であったことで、それぞれが全く異なるお面を完成させていた。ある幼児は、両親が営んでいる美容室に関連させ、髪の毛を上へともり上げていく様子をお面で表現していた。このことは制作終了後、筆者と保育者が作品を前にして行った会話のなかで、保育者から伝えられた内容となる。

【活動2（別紙、写真2）】

①タイトル：「夏の天蓋 -夏の音を感じながら、様々な素材でかざりをつくって飾ってみよう！-」

②実施者：西園政史・榊貴美

③場所：和歌山県 T 保育園

④開催日：平成25年8月8日（木曜日）

⑤時間：午前9：00 - 11：00の2時間

⑥対象年齢（人数・グループ数）：2～5歳（9名・1グループ）

⑦園に示したワークショップコンセプト：

「天蓋という異空間を生み出す素材を用い、そこに、飾り付けを行います。飾りは、幼児自ら制作することで、天蓋の持つ空間とそこに飾るものとの関係性を意識し、また様々な素材に触れ、質感の違いを感じとりながら作業が行われます。

さらに、空間を夏の音で包むことで、無意識、または意識への働きかけが発生し、音のイメージが造形表現へのきっかけとなり音とイメージの繋がりを築く経験となります。空間をつくる遊びは、何かに見立てて遊ぶことの延長にありながら、造形表現としての美しさを体感することが含まれます。」

⑧活動詳細：

この時期の幼児は、3歳前後では、できた形を何かに見立てて名前をつけて遊び、4歳前後では、目的をもってつ

くり、そのための工夫をするようになる。描画に関しても、描いた結果に何らかの意味付けを行うなど、つくったものとその内容とは関係性を持つことになる。そこで、今回の題材では、天蓋という異空間を生み出す素材を用い、そこに、飾り付けを行う。活動する空間には、夏の虫の鳴き声や、実施園近くで行われた盆踊りの音を流した。飾りは、幼児自ら制作することで、天蓋の持つ空間とそこに飾るものとの関係づけ、作業が行われる。空間をつくる遊びは、構成された空間を何かに見立てて遊ぶことと、造形表現としての美しさを体感することが含まれている。天蓋は、少し透ける素材のため、外と内とのイメージが行き来する境界をつくることになる。空間を分ける紗の存在は、幼児にとって非日常的感觉を得ることと同時に、幻想的な感覚を体感する場となる。

飾りは、段ボールを土台とし、そこに様々な素材を貼り付け制作する。貼り付ける素材は、ストロー、紙紐、綿、ボタン、布などの、質感の異なる様々な素材を使用する。また、このワークショップでは、導入時の素材に触れる場面で指導者から「どんな感じがする？」と問いかけを行った。これは、何かに触れることで感じる感覚を、言葉と結びつけることを目的としている。

⑨幼児の活動の姿：

音や、透ける紗が設置された空間によって、空間全体を通して造形活動が行われた。幼児は、自分たちが聞いたことのある盆踊りの音に反応し、用意された材料に触れながら各々の発想で飾りをつくっていた。また、ものに触れた際、感じたことを擬態語や擬音語で表現したり、素材を別なものに見立てたりし、言葉で伝える姿があった。

例えば、ある幼児が綿を手にとり、「ふわふわしてる」と発言し、これらの行為を見聞きしていた別の幼児が、自分に目の前にある発言の対象となった綿と同様のものに触れ、「これもふわふわしてる」と発言している。これは、他者の発言と行動により、自らの行為に至っていることから、「ふわふわ」という質感を他者と共有していると読み取れる。さらに、最初の幼児は、両手を器に見立て「かきごおり」と発言している。この幼児は、素材から質感を感受し、夏のイメージを持って日常生活と造形活動を関係づけているといえる。

つくった飾りは、遊戯室天井から取り付けられた天蓋に付けることで、作品は完成の形となる。制作終了後には、飾りを取り付けた天蓋の中に幼児全員で入り、幼児だけの空間が作り出されていた。幼児は、寝転んで見上げたり、透けた外側や揺れる様子をみたり、天蓋の外側を走ったり

し、設置空間全体を捉えていた。

【活動3（別紙、写真3）】

①タイトル:「カラフルメッセージボード 富田駅協同壁画制作」

②実施者:西園政史・榊貴美

③場所:和歌山県 T 幼稚園

④開催日:平成26年8月22日(金曜日)

⑤時間:午前9時～10時30分

⑥対象年齢(人数・グループ数):5～6歳(48名・10グループ)

⑦園に示したワークショップコンセプト:

「子どもたちには、様々な形にカットされ色の塗られた板の上に、絵の具(エコ黒板塗料)を使って描いてもらいます。よく使用する四角い白い画用紙ではなく、形、色がすでに作られているものに描くことは、子ども達にとって新たな体験となります。さらに、その板に描く絵の具の色数は3色程度に限定されており、制限された世界のなかでカットされた形を観察しながら描くことで、全体のバランスを思考しながら描くこととなります。

描く方法としては、カットされた板に子どもたちの感性を頼りに自由に描いてもらいます。カットされた板の形や色に刺激を受け、さらには、グループ内の子ども同士が、協同で一つのを制作することによって、状況に影響を受けながら制作を進めることを行います。

描くことは、グループに設置された絵の具を使い自由に描いてもらいますが、補助的な役割として、円、三角、四角等の型紙を用意しています。形をなぞることで、描くことの助けになるよう用意しておきます。

最終的に子どもたちが描いた板は、カラフルなメッセージボードとなります。駅舎に設置後は、チョークを用いて自由に絵を描いたり、メッセージを残すことが可能となります。」

⑧活動詳細:

この頃の子どもたちは、空間認識が深まる。記号化された形を自らの感性で読み取り、表現へと発展させることは、新たな形との出会いとなる。このワークショップでは、「作られた形」の上に絵を描くことで、一般的に絵を描く時に使われる四角い白い紙に描く行為とは異なる「描く」ことの獲得に至る。

板(支持体)は、動物・植物・昆虫・人間等の形を用意した。そこには、すでに一色塗られている。この理由としては、塗料で板に描く際、直接板に描くと板が塗料を吸収

することから発色が悪くなり、色が沈んで見えるためである。そして、幼児が用いる塗料は、塗られた一色に合わせワークショップ実施者(筆者)によって色を混色し、3色から4色を用意した。これは、ある程度色が混ざり合ったとしても、完成作品のクオリティを維持するよう設定していたためである。最終的に、駅舎に飾ることが決まっていたため、幼児の描く内容を少しだけワークショップ実施者によって演出している。これは、支持体との形の出会いもそうだが、これまでに幼児の経験になかった出来事だと想定できる。完成作品は、ワークショップ主催者によって、駅舎内に設置された。

⑨幼児の活動の姿

幼児は、遊戯室の床いっばいに敷かれたブルーシートの上で、形に切り取られた板(支持体)に向かって筆を動かしていた。最初は、4,5人のグループに分かれ、1つの板を囲むようにして描いていた。しかし、ある幼児は、自分の担当する画面が色で埋まると、隣の板に行き自分の使用している塗料のついた筆を持って描く行為に至っていた。1つの板に対して、色のバランスを意識し設定の色を用意していたが、そのイメージを超える作品が出来上がっていたことに、美術家として新鮮な感覚を得た。また、最初の園に対する説明では、型は、描くイメージがわからない幼児に対して、あくまでも補助の意味で用意したものである、と伝えていた。しかし、多くの幼児が、その型を活用し絵を描いていたことに、筆者は驚きを持った。補助の意味で用意したため、簡易的な説明しかしていない状態で、幼児は、主体的に描く行為へと発展させていた。また、他の幼児の型を使う姿をみて、自らも型を用いるなど、学び合いの姿があった。

幼児は、自らの感覚を持ち判断し、描く行為を行っていた。ここからは、今までにこのような状態で絵を描く経験のなかった幼児がのびのびと描く姿から、状況に合わせて自らの描く行為を変化させる力を持っているといえる。

【活動4（別紙、写真4）】

①タイトル:「影絵で遊ぶ不思議な世界—音と背景と形の組み合わせ」

②実施者:西園政史・榊貴美

③場所:和歌山県 Y 保育園

④開催日:平成27年8月18日(火曜日)

⑤時間:午前9時～11時

⑥対象年齢(人数・グループ数):4～5歳(19名)

⑦園に示したワークショップコンセプト:

「このワークショップでは、影を利用した表現を行います。暗闇の中に浮かび上がる影は、普段なら特別なものではないはず。しかし、その光と影を造形・美術のなかで利用すると、そこには影の不思議な世界が広がります。

テーマとして、「見えないを遊ぶ」ということが上げられます。「見えない」ことの経験には、限られた要素から形を想像する力が内在しています。形と形が組み合わせれば、新たに一つの形が出現します。子どもは、記号化された要素から、これまでの自らの経験に照らし合わせ、自らの答えを探そうとします。つまり、見えないことによる形の経験は、探す、気付く、組み合わせる、つくることを含み、想像への刺激となります。また、普段利用している空間が、幻想的な世界に包まれることによる非日常体験は、新たな経験となります。」

⑧活動詳細：

この時期の子どもにとって、環境や状況、他者との関わりは重要な学びとなる。日常と違う指導者が介入して一定の時間を過ごすことや暗闇の体験は、造形活動に興味を持つきっかけになると考えている。また、舞台のように設置したスクリーンは、非日常を感じさせる状況を作り上げている。日常とは異なる空間で造形を行うことにより得る新たな色や形、空間は、想像・創造の刺激となる。

本ワークショップは、まず始めにワークショップ主催者が、エリック・カール作の『はらぺこあおむし』⁴⁾を影絵にしたものを演じる。それを鑑賞した幼児は、「蝶」の影絵を黒い画用紙とカラーセロハンで制作する。影絵の完成後、室内を暗くしスクリーンに光をあて、映る影絵を楽しむといった流れになる。

⑨幼児の活動の姿：

完成した蝶に竹ひごをつけ、光を当てたスクリーンの前で遊ぶ姿が見られた。まるで飛んでいるようにつくった蝶を動かす幼児の姿、また、光源とスクリーンとの距離の取り方で、影が大きくスクリーンに映ったり、小さく映ったりすることを発見する幼児の姿が見られた。幼児は、互いに蝶を飛ばす姿をみせ合い、制作した蝶を介して対話、コミュニケーションが生まれていた。

【活動5（別紙、写真5）】

①タイトル：「empty tree（エンプティイー・ツリー）の為のワークショップ 動物シルエットワークショップ」

②実施者：西園政史・榎貴美

③場所：和歌山県N保育所・H保育所

④開催日：平成29年8月9日（水曜日）・平成29年8月

10日（木曜日）

⑤時間：午前9時30分～10時30分・午前10時30分～11時30分

⑥対象年齢（人数・グループ数）：5～6歳（33名・8グループ）・5～6歳（41名・8グループ）

⑦園に示したワークショップコンセプト：

『『エンプティイー・ツリー』からっぽの木は、イベントや季節ごとに、衣替えができる木として、駅に描く壁画になります。ここには、黒い線や少しの面だけで、木と少しの動物や鳥の巣のような家が描かれています。動物や家のモチーフもほんの少し描かれていますが、葉や花はなく空間が残されています。つまり、なにもない、からっぽの状態の木になります。

そこに、例えば、イベントや季節、行事の際に、それに関係のあるモチーフを木に飾り付けます。例えば、クリスマスにはオーナメント、お正月には絵馬、春にはサクラの花、ハロウィンにはカボチャやがいこつで、木をモチーフでいっぱいにすることができます。からっぽだった木は、何か出来事があるといっぱいの実を付け、それが終わるとまたからっぽの木にもどります。そして、次の出来事があるまで駅に鎮座し、駅の利用者を見守ります。」

⑧活動詳細：

本ワークショップでは、事前に動物の形に切り取られた厚紙を用意している。その動物型の厚紙に、絵の具を混ぜたのりを使い、半紙を貼り付ける。幼児は、自然な曲線でつくられた動物のシルエットに触れることで、そこから新たな造形的な感覚と出合うことになる。色は、赤・青・黄の三色となる。幼児は、その形の中をどのような色味で埋めようか、和紙に触れ貼りながら色を想像し、自由に画面を構成する。

作品の設置は、電車の駅舎内壁面となる。そのため、設置された自らの作品を見ることは、保育所とは異なる空間のため、新たな視点で鑑賞することにつながる。

⑨幼児の活動の姿：

製作で使用した半紙は、水に濡れると破れる性質があるため、慎重に作業をする幼児の姿が見られた。一方で、半紙をこぶのように盛り上げる幼児もいた。幼児の作品をつくる行為は、つねに流動的で、作業によって現れた質感に対し、素直に反応している様子が見られた。同じ材料、同じ説明であっても、ものから得る感覚は十人十色である。この違いによって、作業に違いが生まれ、それぞれの作品の特徴が現れることが読み取れた。

(2) アンケートの内容

貴重な意見が多かったためアンケート結果を原文のまま以下に示す。(下線部筆者)

表1 活動1-1人目のアンケート

S 幼稚園 M 元園長
Q1. ワークショップをうけた幼児の様子はどうでしたか？ ●楽しめていた ○普段と変わらない ○あまり参加できていなかった
Q2. 普段の造形活動とワークショップとでは、違いがありましたか？ ●やったことのない活動だった ○一部同じようなことを行っている ○普段の活動と似ている
Q3. 今回のようなワークショップの内容を今後、普段の造形活動にも取り入れたいですか？または取り入れましたか？ ○取り入れたい(取り入れた) ●部分的に取り入れたい(部分的に取り入れた) ○取り入れない(取り入れていない)
Q4. ワークショップ後、幼児に何か変化はありましたか？変化の内容を含めお書きください。 ・今まで中々作ったりできなかった子ども達が、スムーズに、また笑顔でワークショップに参加することが出来た。 ・子ども達の制作する時の表情のよらかさや雰囲気だけでなく制作する意欲が感じられ、思い描いたり、想像する思考がよく働いていて脳への刺激となった。
Q5. ワークショップ後の園の様子として、教諭・職員、園など、何か変化はありましたか？または考えていることなど。変化の内容を含めお書きください。 [町の文化祭]へワークショップの作品にプラスして、お面から発展させ身体を作成する段階で職員の意欲が感じられ、それが子ども達の気持ちに強く伝わり作品ひとつひとつに子ども達の想いがこめられて展示することが出来た。各小中高各機関の方々から評判も大変良かった。
Q6. ワークショップに関する感想を自由にお書きください。 和歌山の紀南地方は特急で2時間30分も新大阪までかかるため中々さまざまな作品を見たりする機会がない。幼少期の頃にそういう作品を見たり今回のようなワークショップの機会を設けて頂くことで子ども達がかま

えず日常の中に美術(アート等)も含めた文化の気持ちが育っていくこととしますので、ぜひ全国的に展開され発展されていくことを願っています。

表2 活動1-2人目のアンケート

S 幼稚園 T 現園長
Q1. ワークショップをうけた幼児の様子はどうでしたか？ ●楽しめていた ○普段と変わらない ○あまり参加できていなかった
2人の先生が来てくれた時点で子どもの目がいつもとは違っていました。説明を受ける間も何が始まるのかな？と興味津々に聞いているのがわかり、先生方が子どもの興味をひきつけてくれていることに興味しました。作業が始まると最初はどの材料を使おうか戸惑っていた子どもも、時間と共にのびのびと、笑顔で楽しめていたのが、印象的でした。
Q2. 普段の造形活動とワークショップとでは、違いがありましたか？ ●やったことのない活動だった ○一部同じようなことを行っている ○普段の活動と似ている
何よりも、素材の豊富さに驚きました。そして先生方が子どもたちに伝えていた、それぞれの素材の感触の違い…そういうところまで考えた、素材の準備の大切さを知ることができました。 また、自分の好きな物を選び、好きな形にできる…「間違える」ということのない活動が子どもたちにとって、のびのびとできる要因だと感じました。 制作や絵画に取り組むうえで、子どもたちに苦手意識を持たせないこと、好き・楽しいという気持ちを大切にしたいと思っていますが、こうすべき、こうでなくてはならないといった指導をする保育士もいます。保育士の心の持ち方を変えていくことは難しいですが、先生方のような指導を見せて頂くことで、変えていくことができるように思います。
Q3. 今回のようなワークショップの内容を今後、普段の造形活動にも取り入れたいですか？または取り入れましたか？ ●取り入れたい(取り入れた) ○部分的に取り入れたい(部分的に取り入れた) ○取り入れない(取り入れていない)
お面作りの活動後、園でもできるだけ材料を準備し

て、お面につける体作りをしました。作ったものは、10月の文化祭に出品しました。

Q4. ワークショップ後、幼児に何か変化はありましたか？変化の内容を含めお書きください。

・作ることが好きになりました。

いつもは、何かを作る時に必ず「できん」「わからん」と言う子どもがいたのですが、ワークショップ後は、作
ることを自由に楽しめるようになりました。また、材料の
使い方が、子どもらしい発想で、作ったものそのものが
画一的ではなく、個性的になったのも嬉しい変化でし
た。

Q5. ワークショップ後の園の様子として、教諭・職員、園など、何か変化はありましたか？または考えていることなど。変化の内容を含めお書きください。

・指導を受けた5歳児の担任は、その年度は、制作への意識が変わり、材料を豊富に準備し、子どもの発想を大切に、面白い制作をさせることができていましたが、数年がたった為か、また元に戻ってしまっています。

自園の活動を見ていると、絵を描かせなければならない、なにかを作らせなければならない、という概念から抜け出せない保育者が多く、上手にできている、上手に描けているという判断をし、子どもが心から楽しめる活動になっていないのが実情です。常々、口頭で伝えてはいるのですが、保育者の感覚として、もっと違ったスキルを身につけてほしいところです。

どうすれば、保育者の気持ちを変え、子どもたちがのびのびと楽しめる、絵画活動、制作活動ができるようになるのでしょうか？このままでは、子どもたちに苦手意識が芽生え、制作は楽しくない、嫌いという気持ちを持たせてしまうように思います。

Q6. ワークショップに関する感想を自由にお書きください。

・本物に出会うことの大切さ

子どもたちには、日頃より、たくさんを経験をしてほしいと思っています。その中でも、本物に出会うことの大切さをこのワークショップでは感じました。園という閉鎖的な場所では、味わうことのできない部分、園外に出ているいろいろな物を見ることや、園に来ていただいているいろいろな経験を積むことは子どもたちに良い刺激になります。職員もですが・・・

田舎にいてもどうしても、文化的な刺激が少なくなってしまうので、今回のような経験をできたことは、子ども

たちにとってとても良かったと思います。今回のワークショップでみんなが作ることの楽しさを経験でき本当に良かったです。子どもたちの心に今回の経験がいつまでも残ることを願っています。ありがとうございました。

表3 活動2のアンケート

T 保育園	S 元園長
Q1. ワークショップをうけた幼児の様子はどうか？	<input type="radio"/> 楽しめていた <input type="radio"/> 普段と変わらない <input type="radio"/> あまり参加できていなかった
Q2. 普段の造形活動とワークショップとでは、違いがありましたか？	<input checked="" type="radio"/> やったことのない活動だった <input type="radio"/> 一部同じようなことを行っている <input type="radio"/> 普段の活動と似ている
Q3. 今回のようなワークショップの内容を今後、普段の造形活動にも取り入れたいですか？または取り入れましたか？	<input type="radio"/> 取り入れたい（取り入れた） <input checked="" type="radio"/> 部分的に取り入れたい（部分的に取り入れた） <input type="radio"/> 取り入れない（取り入れていない）
Q4. ワークショップ後、幼児に何か変化はありましたか？変化の内容を含めお書きください。	自分の作品を作れたことで満足感を感じており、天蓋に飾った時には作品を見たり、 <u>母親に見てもらったりして喜ぶ姿が見られた。</u> 色々な素材・材料を使用したことで、毛糸やボタン・布などを見ると天蓋のことを話したり、遊びの中でそれらを使って何か作ろうとする様子があった。 日常では感じることのできない空間で過ごすことが、子どもたちにとって、空想の感性が育った部分があるように思えた。
Q5. ワークショップ後の園の様子として、教諭・職員、園など、何か変化はありましたか？または考えていることなど。変化の内容を含めお書きください。	保育士は、素材が豊かに用意してあることに、驚きと準備の必要性や環境が大事なことを改めて確認できた。 <u>作品的には、職員や園ではなかなか発想できないものであり、良い作品作りをして頂き、しばらく遊戯室に飾って遊べたことが子どもたちにとって良かったと思います。</u>

Q6. ワークショップに関する感想を自由にお書きください。

小さな園で、1～5歳児と年齢の幅があり、制作活動をするには大変かなと思いましたが、状況を見ながら進められていたので、子どもたちも無理なく作業できていたように思います。人数も少なく、子どもたちからの擬音語での発想を得るのは少し残念だったかも……。

天蓋は、子どもたちの空想遊びをそそる作品で、しばらく飾って遊びました。

(天蓋の中で、お昼寝、絵本を見る、おもちゃで遊ぶ等)

表4 活動3のアンケート

T 幼稚園	S 園長
Q1. ワークショップをうけた幼児の様子はどうでしたか？	●楽しめていた ○普段と変わらない ○あまり参加できていなかった
Q2. 普段の造形活動とワークショップとでは、違いがありましたか？	●やったことのない活動だった ○一部同じようなことを行っている ○普段の活動と似ている
Q3. 今回のようなワークショップの内容を今後、普段の造形活動にも取り入れたいですか？または取り入れましたか？	●取り入れたい（取り入れた） ○部分的に取り入れたい（部分的に取り入れた） ○取り入れない（取り入れていない）
Q4. ワークショップ後、幼児に何か変化はありましたか？変化の内容を含めお書きください。	形のあるものに、自分で好きな絵の具を選び自由に描くことができたことで、混ざり合う絵の具の偶発的な色合いで仕上がったことに楽しめていた。 筆使用の経験が少なかったが、絵の具で描くことに対して興味を持った子どもが増えた。自分たちの作品が、駅舎に飾られることで家族で見に行った子どもたちが多かった。
Q5. ワークショップ後の園の様子として、教諭・職員、園など、何か変化はありましたか？または考えていることなど。変化の内容を含めお書きください。	絵の具の配色について、用意（準備）された配色が、グループ毎に置かれ、 <u>色合わせがきちんとできていたの</u>

で、仕上がったときに混ざり合っても無理がなく、良い作品になっていたことが、教育者にとっては、配色の合わせ方について勉強になった。また、絵の具を大胆に使っていたことに感心していた。

Q6. ワークショップに関する感想を自由にお書きください。

ワークショップを実施することで、子どもたちに新たな経験をさせられるとともに、教育者にとっても今後の取り組みの参考になることが多い。

期日は違うが、消防車庫でのタンポ描写は、壁面に自由に描いたにもかかわらず、配色の仕方で仕上がりがパステルカラーでまとまり、かわいい作品ができあがりました。

消防車庫壁画制作に園児も一部作品作りをさせてもらったことで、自分たちが作ったものと一体感があり、園庭から毎日見られる場所であることから、子どもたちにとっても良い経験ができ楽しめている。保護者からも好評であった。

表5 活動4のアンケート

U 保育園	N 元園長
Q1. ワークショップをうけた幼児の様子はどうでしたか？	●楽しめていた ○普段と変わらない ○あまり参加できていなかった
Q2. 普段の造形活動とワークショップとでは、違いがありましたか？	○やったことのない活動だった ●一部同じようなことを行っている ○普段の活動と似ている
Q3. 今回のようなワークショップの内容を今後、普段の造形活動にも取り入れたいですか？または取り入れましたか？	○取り入れたい（取り入れた） ●部分的に取り入れたい（部分的に取り入れた） ○取り入れない（取り入れていない）
Q4. ワークショップ後、幼児に何か変化はありましたか？変化の内容を含めお書きください。	何年も経って記憶が薄れています。すみません。
Q5. ワークショップ後の園の様子として、教諭・職員、園など、何か変化はありましたか？または考えていることなど。変化の内容を含めお書きください。	

季節の飾りで切り紙を取り入れた。
 Q6. ワークショップに関する感想を自由にお書きください。
 教材やアイデア等豊富で子どもの発想に保育者も寄り添いながら関わることができました。こどもが「やりたい」「やってみたい」と感じる事が大切だと思いました。

表6 活動5-1つ目のアンケート

H 保育所 Y 所長
Q1. ワークショップをうけた幼児の様子はどうでしたか？ <input checked="" type="radio"/> 楽しめていた <input type="radio"/> 普段と変わらない <input type="radio"/> あまり参加できていなかった
Q2. 普段の造形活動とワークショップとでは、違いがありましたか？ <input type="radio"/> やったことのない活動だった <input checked="" type="radio"/> 一部同じようなことを行っている <input type="radio"/> 普段の活動と似ている
Q3. 今回のようなワークショップの内容を今後、普段の造形活動にも取り入れたいですか？または取り入れましたか？ <input type="radio"/> 取り入れたい（取り入れた） <input checked="" type="radio"/> 部分的に取り入れたい（部分的に取り入れた） <input type="radio"/> 取り入れない（取り入れていない）
Q4. ワークショップ後、幼児に何か変化はありましたか？変化の内容を含めお書きください。 色の混ざり具合などに気付き、絵を描く時に、クレパスの色を重ねて塗ったりしている。
Q5. ワークショップ後の園の様子として、教諭・職員、園など、何か変化はありましたか？または考えていることなど。変化の内容を含めお書きください。 駅に貼っているの、子ども達の方から「見に行ってきた」という話しを聞かせてくれたり、職員も見た感想などを聞かせてくれました。やったことによって、職員も興味関心を持つことができた。保護者との会話のきっかけにもなった。
Q6. ワークショップに関する感想を自由にお書きください。 子ども達と一緒にワークショップ、子ども達の楽しそうな姿、ワクワク感を身近に感じ良い経験になりました。

表7 活動5-2つ目のアンケート

N 保育所 H 所長
Q1. ワークショップをうけた幼児の様子はどうでしたか？ <input checked="" type="radio"/> 楽しめていた <input type="radio"/> 普段と変わらない <input type="radio"/> あまり参加できていなかった
Q2. 普段の造形活動とワークショップとでは、違いがありましたか？ <input type="radio"/> やったことのない活動だった <input checked="" type="radio"/> 一部同じようなことを行っている <input type="radio"/> 普段の活動と似ている
Q3. 今回のようなワークショップの内容を今後、普段の造形活動にも取り入れたいですか？または取り入れましたか？ <input type="radio"/> 取り入れたい（取り入れた） <input checked="" type="radio"/> 部分的に取り入れたい（部分的に取り入れた） <input type="radio"/> 取り入れない（取り入れていない）
Q4. ワークショップ後、幼児に何か変化はありましたか？変化の内容を含めお書きください。 1人ひとり自分の作品が出来たということもあり完成を楽しみにする声が聞かれました。
Q5. ワークショップ後の園の様子として、教諭・職員、園など、何か変化はありましたか？または考えていることなど。変化の内容を含めお書きください。 （無記入）
Q6. ワークショップに関する感想を自由にお書きください。 どんなことをするのだろう？と子ども達も興味津々で、何か作るとなると苦手な子どももいるのですが…動物を選んだり、紙染めした物を貼ったりしていく中で、もっともっとという子どもの姿が見られ楽しかったです。

(3) アンケートの考察

このアンケートは、各施設から保育者1,2名に依頼した。

アンケートのマーク式の部分では、ワークショップを通して幼児が楽しめており、保育者は今後の活動に結びつけたいという前向きな結果となっている。さらに自由記述より、本論が目的とする、生涯学習としての視点において、美術家と保育者が互いに成長でき、それぞれの専門性を高め合う状況をつくり出すための一要素について考察する。

活動1-1人目のアンケート(表1)内で記述された内容

で、「「町の文化祭」へワークショップの作品にプラスしてお面から発展させ身体を作成する段階で職員の意欲が感じられ」とある。これは、ワークショップでつくったお面につく身体部分を、後日継続して制作した際の様子が語られている。ワークショップを単体で終わらせるのではなく、保育者がワークショップを通して感じ取った「作品をつくる感覚」を維持しようとするのが意欲として現れた、と考えられる。そして、これに続き、「ワークショップの機会を設けて頂くことで子ども達がかまえず日常の中に美術（アート等）も含めた文化の気持ちが育っていく」と記述されている。ワークショップは、特別な存在であるが、それが一回の特別であっては、文化として根付くことは難しい。美術家が地域と関わることは、この地域と文化を支える一面があることが理解できる。

活動1-2人目のアンケート（表2）内で記述された内容で、「いつもは、何かを作る時に必ず「できん」「わからん」と言う子どもがいたのですが、ワークショップ後は、作ることを自由に楽しめるようになりました」とある。いつもと違う環境が、制作意欲のきっかけを生んだと考えられる。このことから、普段の造形活動と、本ワークショップがどのような違いをもっていたのかを双方で確認し、共有することで、学びの質は上がると考えられる。さらに、「指導を受けた5歳児の担任は、その年度は、制作への意識が変わり、材料を豊富に準備し、子どもの発想を大切に、面白い制作をさせることができていましたが、数年がたった為か、また元に戻ってしまっています」とある。ワークショップを行ったときは、新鮮な印象が保育者のなかにも残り、造形活動への意識が高い位置にあったと考えられる。が、その後継続ができなかったことを考えると、継続的な美術家からのアプローチとともに、保育者への情報提供も同時に行うことが必要になるといえる。

活動2のアンケート（表3）内で記述された内容で、「母親に見てもらったりして喜ぶ姿が見られた」とある。幼児が、保護者に伝えたいと思う気持ちを、ワークショップを通して形成できたことは、制作への満足を表していると考えられる。また、「作品的には、職員や園ではなかなか発想できないものであり、良い作品作りをして頂き」とある。美術家が持つ発想力は、専門的蓄積がある分、作品づくりという意味では、質を保つことができる。しかし、その施設の幼児の姿を見続けている保育者は、幼児の様子を熟知している。このワークショップの際も、作業に気が向かない幼児がいたが、保育者は常にその子の様子を気にかけていた。そして、サポートすることで、作品づくりが

可能となっていた。つまり、美術家と保育者が連携することで、ワークショップは成立すると捉えることができる。

活動3のアンケート（表4）内で記述された内容で、「色合わせがきちんとできていたので、仕上がったときに混ざり合っても無理がなく、良い作品になっていたことが、教育者にとっては、配色の合わせ方について勉強になった。また、絵の具を大胆に使っていたことに感心していた」とある。普段の造形活動とは、異なる方法で制作が進み、それらは、保育者にとっても新しい学びとなっていることが読み取れる。また、毎日接している幼児を客観的にみる機会を得たことも、保育者にとっては、貴重な時間となる。

活動4のアンケート（表5）内で記述された内容で、「子どもの発想に保育者も寄り添いながら関わることができました」とある。先ほどの、客観的にみることと似ているが、寄り添うという視点は、幼児と保育者が一緒の方向を見ることであり、幼児との共感が活動を支えることになる。幼児と視線を一緒にして、活動を捉える時間も、保育者にとって重要になる、と考えている。

活動5-1つ目のアンケート（表5）内で記述された内容で、「駅に貼っているの、子ども達の方から「見に行ってきた」という話を聞かせてくれたり、職員も見た感想などを聞かせてくれました。やったことによって、職員も興味関心を持つことができた。保護者との会話のきっかけにもなった」とある。作品が色々な場面で語られている様子が伺える。作品は、つくって終わりではなく、鑑賞を通して、他者とつながるツールとなっていることが読み取れる。

活動5-2つ目のアンケート（表6）内で記述された内容で、「何か作るとなると苦手な子どももいるのですが…動物を選んだり、紙染めした物を貼ったりしていく中でもっともという子どもの姿が見られ楽しかったです」とある。毎日の生活という日常と、ワークショップという非日常が、良いバランスを保つこと、また、普段とは違う状況を生むことが、幼児の一步前へ出るきっかけにつながると考えている。

3 まとめ

保育者に対して行ったアンケートからは、ワークショップを通じて保育者にとって学びが発生したことが示されていた。また、ワークショップが保育者に与えた学びが継続されるどうかは、保育者によって異なることも、アンケートから読み取れた。幼児が新しい出来事に出会い、充実した時間として過ごしたことは、筆者も目にしていたが、普

段接している保育者も同じ印象を受けていたことをアンケート結果より導き出した。

この結果を総合的にみると、美術家がワークショップを行うことで、施設・保育者に対し新たな出会い、新たな学びを提供することが可能となる。しかし、生涯学習の視点で捉えれば、この出来事が一時的なことではなく、継続が求められる。この点は、今後の課題となる。

註

1) 「ワークショップ」という言葉は、近年様々な形で用いられており、その意味も変化している。佐伯胖（監修者）渡部信一（編者）『「学び」の認知科学事典』、大修館書店、2010、p.247によれば、ワークショップとは、

「参加者が、自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイルである。」としている。本論では、生涯学習という位置づけから、この考え方を参考とした。

- 2) 藤田知里「造形ワークショップ「リズムでねんど」の試み」『就実教育実践研究』第10巻、2017年、pp.135-143
- 3) 木谷安憲「保育者を養成するためのワークショップ的題材開発の研究—保育内容（表現・造形）の授業を通して—」『川口短大紀要』第29号、2015年、pp.159-171
- 4) エリック・カール作、もりひさし訳『はらぺこあおむし』偕成社、1997年



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5